

# 土佐日記

紀貫之

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとするなり。その年（承平四年）のしはすの二十日あまり一日の、戌の時に門出す。そのよしいさゝかものかきつく。ある人縣の四年五年はてゝ例のことゝも皆しをへて、解由など取りて住むたちより出でゝ船に乗るべき所へわたる。かれこれ知る知らぬおくりす。年ごろよく具しつる人々なむわかれ難く思ひてその日頻にとかくしつゝのゝしるうちに夜更けぬ。

廿二日、和泉の國までとたひらかにねがひたつ。藤原の言實船路なれど馬の餞す。上中下ながら酔ひ過ぎていと怪しくしほ海のほとりにてあざれあへり。

廿三日、八木の康教といふ人あり。この人國に必ずしもいひつかふ者にもあらざるなり。これぞ正しきやうにて馬の餞したる。かみからにやあらむ、國人の心の常として今はとて見えざるを心あるものは恥ぢずきなむきける。これは物によりて譽むるにしもあらず。

廿四日、講師馬の餞しに出でませり。ありとある上下童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。

廿五日、守のたちより呼びに文もて來れり。呼ばれて至りて日ひとひ夜ひとよとかく遊ぶやうにて明けにけり。

廿六日、なほ守のたちにてあるじしのゝしりてをのこらまでに物かづけたり。からうた聲あげていひけり。やまとうた、あるじもまらうどもこと人もいひあへりけり。からうたはこれにはえ書かず。やまとうたあるじの守のよめりける、

「都いでゝ君に逢はむとこしものをこしかひもなく別れぬるかな」となむありければ、かへる前の守のよめりける、

「しろたへの浪路を遠くゆきかひて我に似べきはたれならなくに」ことひとびとのもありけれどさかしまもなかるべし。とかくいひて前の守も今のも諸共におりて、今のあるじも前のも手取りかはしてゑひごとに心よげなることとして出でにけり。

廿七日、大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに京にて生れたりし女子こゝにて俄にうせにしかば、この頃の出立いそぎを見れど何事もえいはず。京へ歸るに女子のなきのみぞ悲しび戀ふる。ある人々もえ堪へず。この間にある人のかきて出せる歌、

「都へとおもふもものゝかなしきはかへらぬ人のあればなりけり」。  
又、或時には、

「あるものと忘れつゝなほなき人をいつらと問ふぞ悲しかりける」といひける間に鹿兒の崎といふ所に守のはらからまたことひとこれかれ酒なにと持て追ひきて、磯におり居て別れ難きことをいふ。守のたちの人々の中にこの來る人々ぞ心あるやうにはいはれほのめく。かく別れ難くいひて、かの人々の口綱ももろもちにてこの海邊にて荷ひいだせる歌、

「をしと思ふ人やとまるとあし鴨のうち群れてこそ我はきにけれ」といひてありければ、いといたく愛でゝ行く人のよめりける、

「棹させど底ひも知らぬわたつみのふかきこゝろを君に見るかな」といふ間に楫取ものゝ哀も知らずでおのれし酒をくらひつれば、早くいなむとて「潮満ちぬ風も吹きぬべし」とさわげば船に乗りなむとす。この折にある人々折節につけて、からうたども時に似つかはしきいふ。又ある人西國なれど甲斐歌などいふ。かくうたふに、ふなやかたの塵も散り、空ゆく雲もたゞよひぬとぞいふなる。今宵浦戸にとまる。藤原のとき實、橘の季衡、こと人々追ひきたり。

廿八日、浦戸より漕ぎ出でゝ大湊をおふ。この間にはやくの國の守の子山口の千岑、酒よき物どももてきて船に入れたり。ゆくゆく飲みくふ。

廿九日、大湊にとまれり。くす師ふりはへて屠蘇白散酒加へてもて來たり。志あるに似たり。元日、なほ同じとまりなり。白散をあるもの夜のまどてふなやかたにさしはさめりければ、風に吹きならさせて海に入れてえ飲まずなりぬ。芋しあらめも齒固めもなし。かやうの物もなき國なり。求めもおかず。唯おしあゆの口をのみぞ吸ふ。このすふ人々の口を押年魚もし思ふやうあらむや。今日は都のみぞ思ひやらるゝ。「九重の門のしりくめ繩のなよしの頭ひゝら木らいかに」とぞいひあへる。

二日、なほ大湊にとまれり。講師、物、酒などおこせたり。

三日、同じ所なり。もし風浪のしばしと惜む心やあらむ、心もとなし。

四日、風吹けばえ出でたゝず。昌連酒よき物たてまつれり。このかうやうの物もて來るひとになほしもえあらでいさゝげわざせさすものもなし。にぎはゝしきやうなれどまくることゝす。

五日、風浪やまねば猶同じ所にあり。人々絶えずとぶらひにく。

六日、きのふのごとし。

七日になりぬ。同じ湊にあり。今日は白馬を思へどかひなし。たゞ浪の白きのみぞ見ゆる。かゝる間に人の家の池と名ある所より鯉はなくて鮒よりはじめて川のも、海のも、ことものども、ながびつになひつゞけておこせたり。わかかなに入れて雉など花につけたり。若菜ぞ今日をば知らせたる。歌あり。そのうた、

「淺茅生の野邊にしあれば水もなき池につみつるわかななりけり」。

いとをかしかし。この池といふは所の名なり。よき人の男につきて下りて住みけるなり。この長櫃の物は皆人童までにくれたれば、飽き満ちて舟子どもは腹鼓をうちて海をさへおどろかして浪たてつべし。かくてこの間に事おほかり。けふわりごもたせてきたる人、その名などぞや、今思ひ出でむ。この人歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひひて浪の立つなることゝ憂へいひて詠める歌、

「ゆくそきにたつ白浪の聲よりもおくれ泣かむわれやまきちらむ」

とぞ詠める。いと大聲なるべし。持てきたる物より歌はいかゞあらむ。この歌を此彼あはれがれども一人も返しせず。しつべき人も交れゝどこれをのみいたがり物をのみくひて夜更け

ぬ。この歌ぬしなむ「またまからず」といひてたちぬ。ある人の子の童なる密にいふ「まろこの歌の返しせむ」といふ。驚きて「いとをかきことかな。よみてむやは。詠みつべくばはやいへかし」といふ。「まからずとて立ちぬる人を待ちてよまむ」とて求めけるを、夜更けぬとにやありけむ、やがていにけり。「そもそもいかゞ詠んだる」といふかしがりて問ふ。この童さすがに耻ぢていはず。強ひて問へばいへるうた、

「ゆく人もとまるも袖のみだ川みぎはのみこそぬれまさりけれ」

となむ詠める。かくはいふものか、うつくしければにやあらむ、いと思はずなり。童ごとにては何かはせむ、女翁にをしつべし、悪しくもあれいかにもあれ、たよりあらば遣らむとておかれぬめり。

八日、さはる事ありて猶同じ所なり。今宵の月は海にぞ入る。これを見て業平の君の「山のはにげて入れずもあらなむ」といふ歌なむおもほゆる。もし海邊にてよまゝしかば「浪たちさへて入れずもあらなむ」と詠みてましや。今この歌を思ひ出でゝある人のよめりける、

「てる月のながるゝ見ればあまの川いつるみなとは海にざりける」

とや。

九日、つとめて大湊より那波の泊をおはむとて漕ぎ出でにけり。これかれ互に國の境の内はとて見おくりにくる人数多が中に藤原のときぎね、橘の季衡、長谷部の行政等なむみたちより出でたうびし日より此所彼所におひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志はこの海には劣らざるべし。これより今は漕ぎ離れて往く。これを見送らむとてぞこの人

どもは追ひきける。かくて漕ぎ行くまにまに海の邊にとまれる人も遠くなりぬ。船の人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし、船にも思ふことあれどかひなし。かゝれどこの歌を獨言にしてやみぬ。

「おもひやる心は海を渡れどもふみしなれば知らずやあるらむ」。

かくて宇多の松原を歩き過ぐ。その松の數幾そばく、幾千年へたりと知らず。もどごとに浪うちよせ枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るに堪へずして船人のよめる歌、

「見渡せば松のうれごとすむ鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる」

とや。この歌は所を見るにえまさらず。かくあるを見つゝ漕ぎ行くまにまに、山も海もみなくれ、夜更けて、西ひんがしも見えずして、てけのこと櫂取の心にまかせつ。男もならはねばいと心細し。まして女は船底に頭をつきあてゝねをのみぞなく。かく思へば舟子櫂取は船歌うたひて何とも思へらず。そのうたふうたは、

「春の野にてぞねをばなく。わが薄にて手をきるきる、つんだる菜を、親やまほるらむ、姑やくふらむ。かへらや。よんべのうなあもがな。ぜにこはむ。そらごとをして、おぎのりわざをして、ぜにももてこずおのれだにこず」。

これならず多かれども書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれども心は少しなきぬ。かくゆきくらして泊にいたりて、おきな人ひとり、たうめ一人あるがなかに、心ちあしみてものも物し給はでひそまりぬ。

十日、けふはこの那波の泊にとまりぬ。

十一日、曉に船を出して室津をおふ。人皆まだねたれば海のありやうも見えず、唯月を見てぞ西東をば知りける。かゝる間に皆夜明けて手あらひ例の事どもして晝になりぬ。いましはねといふ所にきぬ。わかき童この所の名を聞きて「はねといふ所は鳥の羽のやうにやある」といふ。まだ幼き童のことなれば人々笑ふ。時にありける女の童なむこの歌をよめる、

「まことにて名に聞く所はねならば飛ぶがごとくにみやこへもがな」

とぞいへる。男も女もいかで疾く都へもがなと思ふ心あれば、この歌よしとはあらねどげにと思ひて人々わすれず。このはねといふ所問ふ童の序にて、又昔の人を思ひ出で、いづれの時にか忘るゝ。今日はまして母の悲しがらるゝ事は、くだりし時の人の數足らねば、ふるき歌に「數はたらでぞかへるべらなる」といふことを思ひ出で、人のよめる、

「世の中におもひやれども子を戀ふる思ひにまさる思ひなきかな」といひつゝなむ。

十二日、雨降らず。文時、維茂が船のおくれたりし。ならしつより室津にきぬ。

十三日の曉にいさゝか小雨ふる。しばしありて止みぬ。男女これかれ、ゆあみなどせむとてあたりのよろしき所におりて行く。海を見やれば、

「雲もみな浪とぞ見ゆる海土もがないつれか海と問ひて知るべく」

となむ歌よめる。さて十日あまりなれば月おもしろし。船に乗り始めし日より船には紅くよききぬ着ず。それは海の神に怖ちてといひて、何の蘆蔭にことづけてはやのつまのいずしすしあはびをぞ心にもあらぬはぎにあげて見せける。

十四日、曉より雨降れば同じ所に泊れり。船君せちみす。さうじものなければ午の時より後に楳取の昨日釣りたりし鯛に、錢なければよねをとりかけておちられぬ。かゝる事なほありぬ。楳取又鯛もてきたり。よね酒しばしばくる。楳取けしきあしからず。

十五日、今日小豆粥煮ず。口をしくなほ日のあしければぬざるほどにぞ今日廿日あまり経ぬ。徒に日をふれば人々海をながめつゝぞある。めの童のいへる、

「立てばたつぬれば又ある吹く風と浪とは思ふどちにやあるらむ」。

いふかひなきものゝいへるにはいと似つかはし。

十六日、風浪やまねば猶同じ所にとまれり。たゞ海に浪なくしていつしかみさきといふ所渡らむとのみなむおもふ。風浪ともにやむべくもあらず。ある人のこの浪立つを見て詠めるうた、

「霜だにもおかぬかたぞといふなれど浪の中にはゆきぞ降りける」。

さて船に乗りし日よりけふまでに廿日あまり五日になりにけり。

十七日、曇れる雲なくなりて曉月夜いとおもしろければ、船を出して漕ぎ行く。このあひだに雲のうへも海の底も同じ如くになむありける。うべも昔のをのこは「棹は穿つ波の上の月を。船は襲ふ海のうちの空を」とはいひけむ。きゝされに聞けるなり。又ある人のよめる歌、

「みなぞこの月のうへより漕ぐふねの棹にさはるは桂なるらし」。

これを聞きてある人の又よめる、

「かげ見れば浪の底なるひさかたの空こぎわたるわれぞさびしき」。



かくいふあひだに夜やうやく明けゆくに、楫取等「黒き雲にはかに出できぬ。風も吹きぬべし。御船返してむ」といひてかへる。このあひだに雨ふりぬ。いとわびし。

十八日、猶同じ所にある。海あらければ船いださず。この泊遠く見れども近く見れどもいとおもしろし。かゝれども苦しければ何事もおもほえず。男どちは心やりにやあらむ、からうたなどいふべし。船もいださでいたづらなればある人の詠める、

「いそぶりの寄する磯には年月をいつとも分かぬ雪のみぞふる」

この歌は常にせぬ人のごとなり。又人のよめる、

「風による浪のいそにはうぐひすも春もえしらぬ花のみぞ咲く」。

この歌どもを少しよろしと聞きて、船のをさしける翁、月頃の苦しき心やりに詠める、

「立つなみを雪か花かと吹く風ぞよせつゝ人をはかるべらなる」。

この歌どもを人の何かといふを、ある人の又聞きふけりて詠める。その歌よめるもじ三十字あまり七文字、人皆えあらで笑ふやうなり。歌ぬしいと気色あしくてえず。まねべどもえまねばず。書けりともえ読みあへがたかるべし。今日だにいひ難し。まして後にはいかならむ。十九日、日あしければ船いださず。

二十日、昨日のやうなれば船いださず、皆人々憂へ歎く。苦しく心もとなければ、唯日の経ぬる数を、今日いくか、二十日、三十日と数ふれば、およびもそこなはれぬべし。いとわびし。夜はいも寝ず。二十日の夜の月出でにけり。山のはもなく海の中よりぞ出でくる。かうやうなるを見てや、むかし安倍の仲麻呂といひける人は、もろこしに渡りて歸りきける時

に、船に乗るべき所にて、かの國人馬の餞し、わかれ惜みて、かしこのからうた作りなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ仲麻呂のぬし「我が國にはかゝる歌をなむ神代より神もよんだび、今は上中下の人もかうやうに別れ惜み、よろこびもあり、かなしみもある時には詠む」とてよめりける歌、

「あをうなばらふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」

とぞよめりける。かの國の人聞き知るまじくおもほえたれども、この心を男文字にさまを書き出して、この詞傳へたる人にいひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひの外になむめでける。もろこしこの國とはこととなるものなれど、月の影は同じことなるべければ人の心も同じことにやあらむ。さて今そのかみを思ひやりて、或人のよめる歌、

「都にてやまのはに見し月なれどなみより出でゝなみにこそ入れ」。

廿一日、卯の時ばかりに船出す。皆人々の船出づ。これを見れば春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。おぼろげの願に依りてにやあらむ、風も吹かずよき日いできて漕ぎ行く。この間につかはれむとて、附きてくる童あり。それがうたふ舟うた、

「なほこそ國のかたは見やられるれ、わが父母ありとしおもへば。かへらや」

とうたふぞ哀なる。かくうたふを聞きつゝ漕ぎくるに、くろとりといふ鳥岩のうへに集り居り。その岩のもとに浪しろくうち寄す。楫取のいふやう「黒鳥のもとに白き浪をよす」とぞいふ。この詞何とにはなけれど、ものいふやうにぞ聞えたる。人の程にあはねば咎むるなり。

かくいひつゝ行くに、船君なる人浪を見て、國よりはじめて海賊報いせむといふなる事を思ふうへに、海の又おそろしければ、頭も皆しらけぬ。七十八は海にあるものなりけり。

「わが髪のはげきとこそそべのしら浪とらづれまざれりおきつ島もり」  
楫取りへ。

廿二日、よんべのとまりよりことゝまりをおひてぞ行く。遙に山見ゆ。年九つばかりなるをの童、年よりは幼くぞある。この童、船を漕ぐまにまに、山も行くと見ゆるを見て、あやしきこと歌をぞよめる。そのうた、

「漕ぎて行く船にて見ればあしびぎの山さへゆくを松は知らずや」

とぞいへる。幼き童のことにては似つかはし。けふ海あらげにて磯に雪ふり浪の花さけり。ある人のよめる。

「浪とのみひとへに聞けどいろ見れば雪と花とにまがひけるかな」。

廿三日、日てりて曇りぬ。此のわたり、海賊のおそりありといへば神佛を祈る。

廿四日、昨日のおなじ所なり。

廿五日、楫取らの北風あしといへば、船いださず。海賊追ひくといふ事絶えずきこゆ。

廿六日、まことにやあらむ、海賊追ふといへば夜はばかりより船をいだして漕ぎくる。道にたむけする所あり。楫取してぬさたいまつらするに、幣のひんがしへちれば楫取の申し奉ることは、「この幣のちるかたにみふね速にこがしめ給へ」と申してたてまつる。これを聞きある女の童のよめる、

---

「わたつみのちぶりの神にたむけするぬさのおひ風やまずふかなむ」

とぞ詠める。このあひだに風のよければ楫取いたくほこりて、船に帆あげなど喜ぶ。その音を聞きてわらはもおきなもいつしかとし思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。このなかに淡路のたうめといふ人のよめる歌、

「追風の吹きぬる時はゆくふねの帆手うちてこそうれしかりけれ」

とぞ。ていけのことにつけていのる。

廿七日、風吹き浪あらければ船いださず。これかれかしこく歎く。男たちの心なぐさめに、からうたに「日を望めば都遠し」などいふなる事のおさまを聞きて、ある女のよめる歌、

「日をだにもあま雲ちかく見るものを都へとおもふ道のはるけさ」。

又ある人のよめる。

「吹くかぜの絶えぬ限りし立ちくれば波路はいとゞはるけかりけり」。

日ひと日風やまず。つまはじきしてねぬ。

廿八日、よもすがら雨やまず。けさも。

廿九日、船出して行く。うらうらと照りてこぎゆく。爪のいと長くなりたるを見て日を數ふれば、今日は子の日なりければ切らず。正月なれば京の子の日の事いひ出で、  
「小松もがな」といへど海中なれば難しかし。ある女の書きて出せる歌、

「おぼつかかなけふは子の日かあまならば海松をだに引かましものを」

とぞいへる。海にて子の日の歌にてはいかゝあらむ。又ある人のよめるうた、

「けふなれど若菜もつまず春日野のわがこぎわたる浦になければ」。

かくいひつゝ漕ぎ行く。おもしろき所に船を寄せて「こゝやいづこ」と問ひければ、「土佐のとまり」とぞいひける。昔土佐といひける所に住みける女、この船にまじれりけり。そがいひけらく、「昔しばしありし所の名たぐひにぞあなる。あはれ」といひてよめる歌、

「年ごろをすみし所の名にしおへばきよる浪をもあはれとぞ見る」。

三十日、雨風ふかず。海賊は夜ありきせざなりと聞きて、夜中ばかりに船を出して阿波のみとを渡る。夜中なれば西ひんがしも見えず、男女辛く神佛を祈りてこのみとを渡りぬ。寅卯の時ばかりに、ぬ島といふ所を過ぎてたな川といふ所を渡る。からく急ぎて和泉の灘といふ所に至りぬ。今日海に浪に似たる物なし。神佛の惠蒙ぶれるに似たり。けふ船に乗りし日より數ふればみそかあまり九日になりけり。今は和泉の國に來ぬれば海賊ものならず。

二月朔日、あしたのま雨降る。午の時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ所より出で、漕ぎ行く。海のうへ昨日の如く風浪見えず。黒崎の松原を経て行く。所の名は黒く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くに、貝のいろは蘇枋にて五色に今ひというぞ足らぬ。この間に今日は箱の浦といふ所より綱手ひきて行く。かく行くあひだにある人の詠める歌、

「玉くしげ箱のうらなみたゝぬ日は海をかゝみとたれか見ざらむ」。

又船君のいはく「この月までなりぬること」と歎きて苦しきに堪へずして、人もいふことゝて心やりにいへる歌、

「ひく船の綱手のながき春の日をよそいかまでわれはへにけり」。

聞く人の思へるやう、なぞたゞごとになると密にいふべし。「船君の辛くひねり出してよしと思へる事をえしもこそしいへ」とてつゝめきてやみぬ。俄に風なみたかければとゞまりぬ。

二日、雨風止まず。日ひとひ夜もすがら神佛をいのる。

三日、海のうへ昨日のやうなれば船いださず。風の吹くことやまねば岸の浪たちかへる。これにつけてよめる歌、

「緒をよりてかひなきものは落ちつもる涙の玉をぬかぬなりけり」。

かくて、今日暮れぬ。

四日、楫取「けふ風雲のけしきはなはだあし」といひて船出さずなりぬ。然れどもひねもすに浪風たゞず。この楫取は日も得計らぬかたぬなりけり。この泊の濱にはくさぐさの麗しき貝石など多かり。かゝれば唯昔の人をのみ戀ひつゝ船なる人の詠める、

「よする浪うちも寄せなむわが戀ふる人わすれ貝おりてひろはむ」

といへれば、ある人堪へずして船の心やりによめる、

「わすれ貝ひろひしもせじ白玉を戀ふるをだにもかたみと思はむ」

となむいへる。女兒のためには親をさなくなりぬべし。玉ならずもありけむをと人いはむや。されども死にし子顔よかりきといふやうもあり。猶おなじ所に日を経ることを歎きて、ある女のよめるうた、

「手をひでゝ寒さも知らぬ泉にぞ汲むとはなしに日ごろ經にける」。

五日、けふ辛くして和泉の灘より小津のとまりをおふ。松原めもはるばるなり。かれこれ苦



しければ詠めるうた、

「ゆけどなほ行きやられぬはいもがうむをつの浦なるきしの松原」。

かくいひつゞくる程に「船疾くこげ、日のよきに」と催せば楳取船子どもにいはく「御船より仰せたふなり。あさぎたの出で來ぬさきに綱手はやひけ」といふ。この詞の歌のやうなるは楳取のおのづからの詞なり。楳取はうつたへにわれ歌のやうなる事いふともあらず。聞く人の「あやしく歌めきてもいひつるかな」とて書き出せればげに三十字あまりなりけり。今日浪なたちそと、人々ひねもすに祈るしありて風浪たゞず。今し鷗むれ居てあそぶ所あり。京のちかづくよろこびのあまりにある童のよめる歌、

「いのりくる風間と思ふをあやなくに鷗さへだになみと見ゆらむ」

といひて行く間に、石津といふ所の松原おもしろくて濱邊遠し。又住吉のわたりを漕ぎ行く。ある人の詠める歌、

「今見てぞ身をば知りぬる住のえの松よりさきにわれは經にけり」。

こゝにむかしつ人の母、一日片時も忘れねばよめる、

「住の江に船さしよせよわれ草しるしありやとつみて行くべく」

となむ。うつたへに忘れなむとはあらで、戀しき心ちしばしやすめて又も戀ふる力にせむとなるべし。かくいひて眺めつゞくるあひだに、ゆくりなく風吹きてこげどもこげどもしりへしぞきにしぞきてほとほとしくうちはめつべし。楳取のいはく「この住吉の明神は例の神ぞかし。ほしきものぞおはすらむ」とは今めくものか。さて「幣をたてまつり給へ」といふ

にしたがひてぬさたいまつる。かくたいまつれどもはら風やまで、いや吹きにいや立ちに風浪の危ふければ楳取又いはく「幣には御心のいかねば御船も行かぬなり。猶うれしと思ひたぶべき物たいまつりたべ」といふ。又いふに従ひて「いかゞはせむ」とて「眼もこそ二つあれ。ただ一つある鏡をたいまつる」とて海にうちはめつればいとくちをし。さればうちつけに海は鏡のごとなりぬれば、或人のよめるうた、

「ちはやぶる神のこゝろのあるゝ海に鏡を入れてかつ見つるかな」。

いたく住の江の忘草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし。目もうつらうつら鏡に神の心をこそは見つれ。楳取の心は神の御心なりけり。

六日、漕標のもとより出で、難波につきて河尻に入る。みな人々女おきなひたひに手をあて、喜ぶこと二つなし。かの船酔の淡路の島のおほい子、都近くなりぬといふを喜びて、船底より頭をもたげてかくぞいへる、

「いづしかといふせかりつる難波がた蘆こぎそけて御船きにけり」。

いとおもひの外なる人のいへれば、人々あやしがる。これが中に心ちなやむ船君いたくめで、

「船酔したうべりし御顔には似ずもあるかな」といひける。

七日、けふは川尻に船入り立ちて漕ぎのぼるに、川の水ひて惱みわづらふ。船ののぼることいと難し。かゝる間に船君の病者もとよりこちごちしき人にて、かうやうの事更に知らざりけり。かゝれども淡路のたうめの歌にめで、みやこぼりにもやあらむ、からくしてあやしき歌ひねり出せり。そのうたは、

「きとぎては川のほりえの水をあさみ船も我が身もなつむけふかな。  
これは病をすればよめるなるべし。ひとつたにことの飽かねば今ひとつ、

「とくと思ふ船なやますは我がために水のこゝろのあさきなりけり」。  
この歌は、みやこ近くなりぬるよるこびに堪へずして言へるなるべし。淡路の御の歌におとれり。ねたき、いはざらましものをとくやしがるうちによりて寝にけり。

八日、なほ川のほとりになづみて、鳥養の御牧といふほとりとまる。こよひ船君例の病起りていたく悩む。ある人あさらかなる物もてきたり。よねしてかへりごとす。男ども密にいふなり「いひぼしてもてる」とや。かうやうの事所々にあり。今日節みすればいをもちぬず。九日、心もとなさに明けぬから船をひきつゝのぼれども川の水なければぬざりにのみぬざる。この間に和田の泊りのあかれのところといふ所あり。よねいをなごこへばおこなひつ。かくて船ひきのぼるに渚の院といふ所を見つゝ行く。その院むかしを思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。しりへなる岡には松の木どもあり。中の庭には梅の花さけり。こゝに人々のいはく「これむかし名高く聞えたる所なり。故惟喬のみこのおほん供に故在原の業平の中將の「世の中に絶えて櫻のさかざらは春のこゝろはのどけからまし」といふ歌よめる所なりけり。今興ある人所に似たる歌よめり、

「千代へたる松にはあれどいにしへの聲の寒さはかはらざりけり」。  
又ある人のよめる、

「君戀ひて世をふる宿のうめの花むかしの香かにぞなほにほひける」

といひつゝぞ都のちかづくを悦びつゝのぼる。かくのぼる人々のなかに京よりくだりし時に、皆人子どもなかりき。いたれりし國にてぞ子生める者どもありあへる。みな人船のとまる所に子を抱きつゝおりのりす。これを見て昔の子の母かなしきに堪へずして、

「なかりしもありつゝ歸る人の子をありしもなくてくるが悲しき」

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きていかゞあらむ。かうやうの事ども歌もこのむとてあるにもあらざるべし。もうこしもこゝも思ふことに堪へぬ時のわざとか。こよひ宇土野といふ所にとまる。

十日、さはることありてのぼらず。

十一日、雨いさゝか降りてやみぬ。かくてさしのぼるに東のかたに山のよこをれるを見て人に問へば「八幡の宮」といふ。これを聞きてよるこびて人々をがみ奉る。山崎の橋見ゆ。嬉しきこと限りなし。こゝに相應寺のほとりに、しばし船をとめてとかく定むる事あり。この寺の岸のほとりに柳多くあり。ある人この柳のかげの川の底にうつれるを見てよめる歌、  
「さなれ浪よするあやをば青柳のかげのいとて織るかぞ見る」

十二日、山崎にとまれり。

十三日、なほ山崎に。

十四日、雨ふる。けふ東京へとりにやる。

十五日、今日車ぬてきたれり。船のむつかしさに船より人の家につつる。この人の家よるこべるやうにてあるじしたり。このあるじの又あるじのよきを見るに、うたておもほゆ。いろ

いろにかへりごとす。家の人のいで入りにくげならずあやゝかなり。

十六日、けふのようさりつかた京へのぼるついでに見れば、山崎の小櫃の繪もまがりのおほちの形もかはらざりけり。「賣る人の心をぞ知らぬ」とぞいふなる。かくて京へ行くに島坂にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちてゆきし時よりはくる時ぞ人ほどかくありける。これにもかへりごとす。よるになして京にはいらむと思へば、急ぎしもせぬ程に月いでぬ。桂川月あかきにぞわたる。人々のいはく「この川飛鳥川にあらねば、淵瀬更にかはらざりけり」といひてある人のよめる歌、

「ひさかたの月におひたるかつら川そこなる影もかはらざりけり」。

又ある人のいへる、

「あまぐものはるかなりつる桂川そでをひでゝもわたりぬるかな」。

又ある人よめる、

「桂川わがこゝろにもかよはねどおなじふかさなながるべらなり」。

みやこのうれしきあまりに歌もあまりぞおほかる。夜更けてくれば所々も見えず。京に入り立ちてうれし。家にいたりて門に入るに、月あかければいとよくありさま見ゆ。聞きしよりもましていふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなればのぞみて預れるなり。さるはたよりごとに物も絶えず得させたり。こよひかゝることゝ聲高にもものいはず、いとつらく見ゆれど志をばせむとす。さて池めいてくぼまり水づける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに千年や

過ぎにけむ、かた枝はなくなりけり。いま生ひたるぞまじれる。大かたの皆あれにたれば、「あはれ」とぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく思ひ戀しきがうちに、この家にて生れし女子のもろともに歸らねばいかゞはかなしき。船人も皆子だからてのゝしる。かゝるうちに猶かなしきに堪へずして密に心知れる人といへりけるうた、

「うまれしもかへらぬものを我がやどに小松のあるを見るがかなしや」

とぞいへる。猶あかずやあらむ、またかくなむ、

「見し人の松のちとせにみましかばとほくかなしきわかれせましや」。

わすれがたくくちをしきことおほかれどえつくさず。とまれかくまれ疾くやりてむ。

この文は、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られたデータを利用させていただいています。注意書き・ルビ等は電本座の編集上の都合により省略したり、変更しているものもあります。底本・注意書き・文字データ・校正など詳細を必要とされる方は、青空文庫をご覧ください。